

文化を伝えるカパハカ：ニュージーランドのダンス教育の事例から

土井冬樹 (Huyuki Doi)

神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程

本発表では、ニュージーランドでの先住民の舞踊であるカパハカを用いたダンス教育のあり方を明らかにすることで、日本のダンス教育を相対化し議論の対象にするきっかけとする。

問題意識

日本のダンス教育は、ダンスが文化的身体を作る、という観点において未だ発展途上にあると考えている。

教育基本法では、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う、という目標が掲げられた。体育科目では、武道を通して自国の文化に触れる機会を提供することで、この目標の達成を目指しているようである。一方ダンスの単元においては文化を学ぶものとしての重要性が強調されていない。ダンスや芸能を対象とした研究分野では、それらが文化を教える際に重要であるとする研究は多い。つまり、ダンス、特にフォークダンスは、体育を通して日本文化や外国文化に触れる数少ない単元であるはずである。しかし、指導要領では特徴的なステップや動きで踊ることを目標としており、日本や外国の風土や風習、歴史などの踊りの由来を理解する際には資料や VTR で紹介する程度にとどまっている。学ぶ踊りの例として紹介されている七つのフォークダンスでも、歴史的文化的背景に言及しているものはたった一つしかない。あくまで、特徴的なステップや踊りで踊れることを目標としており、文化的な理解を促進する内容になっているとは言えない。

ニュージーランドの民族舞踊教育

ニュージーランドは、二文化主義国家として、そして先住民政策が進んだ国として知られている。発表者は、ニュージーランドでどのような文化的教育が行われているのか調査する過程で、舞踊の教育に注目した。

ニュージーランドには、先住民であるマオリが生活している。1840年にイギリスの植民地となってからマオリは文化的抑圧を受けてきたが、1960年代以降の文化復権運動で権利を獲得していった。それ以降ニュージーランドはマオリとイギリス移民の子孫を尊重する二文化主義政策をとるようになった。その結果、ニュージーランドに

は二つの教育システムがある。一つはメインストリームと呼ばれる英語を用いた西洋哲学・科学教える学校で、もう一つはクラ＝カウパパと呼ばれる、マオリ語を用いたマオリ哲学・科学を教える学校である。クラ＝カウパパではマオリの民族舞踊であるカパハカは必修科目で全ての子どもが学んでいる。一方メインストリームでカパハカを必修としているところは多くはない。それでも、いくつかのメインストリームの学校では、ダンス教育としてカパハカ教えるケースがある。発表者は、そのような学校の一つで調査を行なった。

調査した小学校は 90%近くをマオリ児童が占めていた。一方で、マオリ語話者は 10%程度であった。非マオリ語話者のマオリの文化的アイデンティティは不安定になりがちであることはこれまでも報告されている。この状況にあって、学校長は「カパハカは、今のマオリの子どもたちが文化的アイデンティティを獲得するのに重要だ」と話す。

学校で行われていたカパハカの教育は、特徴的な動きを踊れるようにする目標とは異なり、(日本の教科割をベースに見れば)教科横断的にマオリの文化を広く教育するものだった。

マオリの民族舞踊は、歌いながら踊るのが基本で、全ての踊りに歌詞が付いている。歌詞の多くはその地域の先祖や歴史を題材にしている。児童は歌詞を覚える段階で、歴史を、そしてマオリ語を学ぶ。

歴史を学ぶことは、舞踊を踊る上でもっとも重要なことの一つだと強調される。踊るときには感情を表現するように言われるが、歌詞に感情移入できなければ間違った感情表現となってしまう。そのため歌詞に記されている歴史は丁寧に説明される。何を歌っているのか知らずして踊ることは許されない。こうして児童は、ダンス教育を受けながら地元の歴史を知り、それを自分の感情として表現できるように知識を内面化する。こうして、カパハカの教育は、マオリとしての文化的アイデンティティを獲得する機会となっているのである。

ニュージーランドの事例からは、民族舞踊の教育が文化の教育に多分に関わっていることを示している。ここに、ダンス教育が単なる身体発達のための教育から解放される可能性を見出せる。世界の様々な身体動作やリズム感を獲得するだけではなく、世界の歴史や文化を学び、自国そして他国に対する敬意と敬愛の態度を養うものとしてダンス教育を捉え直す機会になるといえる。